東京のある中・高校のガ行鼻音の実態及び教員の意識・意見について

李　殷芝

キーワード　鼻音の衰退　内省と意識・意見との関わり　鼻音の指導意見

要　旨　以前、標準的な発音として取り上げられて来たガ行鼻音が今日全国的に衰退しつつある状況にあたって国語教育や日本語教育の方面にも転換の動きが進んでいるようである。本稿は日本語の将来に影響を及ぼす可能性の大きい教員を対象に、鼻音の実態とそれについての意識・意見との関わりを調査、考察したものである。

まず、教員及び生徒の多数の録音を筆者が観察した結果、先学の指摘通り中年教員や生徒において鼻音の衰退、消滅が確認された。なお、教員については自己の音が鼻音かどうかのアンケートも行ったが、その結果も同様であった。

次に、教員のほぼ全員についてのアンケート調査では自己の音であると内省している方にプラス価値意識をもつ個人的な傾向が指摘された。全体的には鼻音の方が非鼻音よりも標準意識、美意識の点でやや高く評価されており、特に国語科教師にそれが著しいことが分かった。ただし鼻音を指導すべきという意見になるとトーンはかなり落ちている。

1．はじめに

韓国の日本語の学習用教材には大体日本のアナウンサーの発音が収録されておりそこに語頭以外のガ行子音はガ行鼻音になっているのが多い。そこで日本語の学習者の中では母国語の音韻体系にgとŋとが音素の対立をなすために日本語のこの異音レベルの鼻音を聞いて最初は音韻論的なたよりがあって何らかの意味の違いがあると考えたり、またŋという標準音にこだわる者もいるようである。しかし元々標準語(共通語)の土台と目されている東京方言のガ行鼻音は時代によって退潮が進んでおり(注1、2、3、4)その傾向は全国的に見られ(注5)特に大都市の若年層にもっと著しいとされている。(注6)このような状況にあたって国内の次元でも標準音として保持すべきかについての論議が起こっていて音声教育

の項目として取り扱うべきかの意見も幾つか見られるが（注7、8、9）その中で水谷修氏は（注9）外国人には音声教育の中、聴音活動の問題点があるゆえ教育の必要があると述べられているのに注目される。以上のような実態報告と論争に接し外国人である筆者としては自分自身による資料収集の必要を感じたわけである。

そこで本稿は日本の将来に影響を及ぼす可能性の大きい教員のガ行鼻音の実態とそれについての意識、意見との関わりを知るためにアンケート調査を行なった。なお参考して補助的に中学生のガ行鼻音の実態も観察、調査した。これが将来国内における言語政策、国語教育さらに外国人に対する日本語の音声教育の方針を決めるのに一つのささやかな参考資料になれば幸いである。

2．調査概要

録音による音声観察のインフォーマントは東京の品川区に位置している私立・立正中・高校教員（男性）２５名と同校の中学生（東京生まれ、育ちの１年生男子）８２名とである。そして教員の意識・意見のアンケート調査は同校の教員ほぼ全員にあたる６１名（女性３名含む）を対象にした。

音声調査の内容は金田一氏（注1）の使用した調査語（単語）を筆者が文章の形にしたもので、録音収録は同校教員に依頼し（１９９３年１月～２月）録音テープを送付してもらったものをすべて筆者が聴いて判断した。＜表１参照＞

そして教員の意識・意見のアンケート調査は１９９３年５月に行ったもので、調査項目は　①自己の音の内省　②標準意識　③美意識　④能率意識　⑤指導意見という内容である。＜表２～７および[付]を参照＞

3．ガ行鼻音実態の全体的な傾向

3．1　調査語（音環境・語の性格）による差

＜表１＞から見られるように調査語ごとに鼻音の発話回数に相違がある。例えば「りんごと～」（ゴ）は２５名の中、１９名によって発話されているのに対して「苺が～」（ゴ）は同じく日常語、単純語、和語でありながら９名のみである。これは従来よく指摘されているように直前が鼻音音節かどうかによるものである。このような現象は助詞「ガ」においても見ることができる。例えば「写真が～」で１６名に、「苺が～」で８名に鼻音の発話がある。また「駒下駄と～」(ゲ)

＜表1＞個人別音声　（語頭以外のガ行子音）

被験者	出身地 父母	本人	生年(昭和)	葉書を ガ	秋草が 助詞ガ	繁って ゲ	卵型の ゴ	卵型の ガ	鏡が ガ	鏡が 助詞ガ	雨傘が ガ	雨傘が 助詞ガ	駒馬下駄 ゲ	箒が ゴ	箒が 助詞ガ	りんご ゴ	苺が ゴ	苺が 助詞ガ	上着が ギ	上着が 助詞ガ	忠義に ギ	海軍の グ	写真が 助詞ガ	泳ぐのが ガ	泳ぐのが 助詞ガ	皮ごと ゴ	食べながら ガ	過ごし ゴ	個人別鼻音発話総数
	（調査語）文節単位			*					*		*		*	*			*		*		*	*		*		*			
(1)宮城 山形		宮城上海	5	●	●	●	●	●	●	●	○	○	●	○	●	●	○	○	○	○	●	●	○	●	●	○	●	●	9
(2) 岩手 岩手		岩手	9	○	●	●	○	●	○	○	○	○	●	○	○	○	○	○	○	○	●	●	○	○	○	○	○	●	18
(3)高知北海道		北海道	9	●	○	●	○	●	●	○	●	●	●	○	○	○	●	●	○	○	●	●	○	○	○	○	●	○	13
(4) 茨城 茨城		茨城	12	○	●	○	○	●	○	○	○	○	●	○	○	○	●	●	○	○	●	●	○	○	○	○	○	●	17
(5) 滋賀 愛媛		北海道	13	○	○	○	○	●	○	○	●	○	●	○	○	○	○	○	●	○	●	●	○	○	○	●	●	●	16
(6) 福島 東京		岩手	13	●	●	○	○	●	○	○	○	○	●	○	○	○	○	○	●	●	●	○	○	○	○	○	●	○	17
(7)神奈川愛知		東京	13	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●	○	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○	●	○	14
(8) 岩手 岩手		岩手	17	●	○	●	○	●	●	●	○	○	○	●	●	○	●	●	●	○	●	●	○	●	●	●	○	●	9
(9)北海道北海道		北海道	14	○	●	●	○	○	●	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○	●	●	5
(10)茨城 茨城		東京	20	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	1
(11)東京 東京		東京	24	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○	●	●	●	●	●	●	●	○	●	●	●	●	2
(12)東京 東京		東京	24	●	●	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○	○	○	●	●	○	●	○	○	●	●	●	○	8
(13)栃木 栃木		東京	24	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○	2
(14)神奈川東京		東京	24	○	○	●	○	●	○	○	○	●	○	○	○	○	●	●	○	○	●	●	○	●	○	○	●	○	16
(15)東京 栃木		東京	24	●	●	●	○	●	○	○	○	○	●	○	○	○	○	○	○	○	●	●	○	○	○	●	●	○	16
(16)茨城 茨城		茨城	34	●	○	○	○	●	○	○	○	○	●	●	○	○	●	●	●	●	●	●	○	●	○	●	●	○	12
(17)新潟 長野		東京	35	○	●	●	○	●	○	○	○	○	●	○	○	○	○	○	○	○	●	●	○	●	○	○	●	●	16
(18)茨城 長野		東京	35	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○	●	●	●	●	●	●	○	●	●	●	●	●	2
(19)新潟 新潟		東京	35	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○	●	●	●	●	●	●	○	●	●	●	●	●	2
(20)長野 大阪		東京	36	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	0
(21)東京 東京		東京	40	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	0
(22)山梨 東京		東京	40	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●	○	●	●	○	●	○	○	●	○	19
(23)東京 愛知		東京	40	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	○	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	1
(24)東京 広島		神奈川	41	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	0
(25)愛知 愛知		愛知	42	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	0
語別鼻音発話総数（25名）				7	7	7	13	3	10	12	11	11	3	11	11	19	8	8	7	10	1	1	16	7	10	10	3	9	215/632
語別鼻音発話総数　中学生（82名）				0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	12	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	18/2050

注　[ɣ] [g] →●　[ɣ̃] [ŋ] →○　　＊→金田一氏の使用した調査語

のように日常語でないものは鼻音が少ない。そして「忠義に～」（ギ）、「海軍の～」（グ）のような死語的になったとともに複合語でもある語らは他の語に比して一層少なく各々一名にしかない。なお複合語の鼻音になりにくい語例は「卵型の～」の「ゴ」（１３名）と「ガ」（３名）との比較でもみることができる。次に、ほんのわずかではあるが、語中、語尾のガ行より助詞「が」のほうがやや鼻音になりやすい傾向があるように思える。例えば「鏡が～」の「鏡」（ガ）（１０名)、助詞「が」(１２名) また「上着が～」の「ギ」(７名)と「ガ」(１０名)、「泳ぐのが～」の「グ」(７名)と「ガ」(１０名) 等である。

３・２　年代差

＜表１＞から分かるように２５個の調査語で５０才以上の被験者では大体１０語以上鼻音の発話があるのに対して５０才以下からはわずか１語ないし２語しかない人もあればさらに皆無である人も見られる。なお、中学生の場合は＜表１＞の下段に示してあるように８２名中ただ「りんごと～」（ゴ）で１２名、「写真が～」（ガ）で５名、「卵型の～」（ゴ」で１名に限って発話された。（いずれも直前に鼻音音節のある場合である）ここでも、年齢が下ると共に衰退しつつあるという従来の諸実態報告を確かめることができた。さらに、金田一氏の研究報告（約半世紀ほど前の中学生には、衰退の前兆を見せるものの調査語ごとに平均半分以上鼻音の発話があったのに対して、ここではただ一名にも見られない）のその後の推移が明らかになったと言える。

３・３　個人差

さて、＜表１＞のように鼻音の衰退が確認される中でも年齢、出身地を問わず鼻音で発話される語数に個人差が認められる。例えば（３）番のように１３語もあるのに対して（９）番のように５語に留まっているようである。このような例は（１１）番と（１４）番との比較でも見られる。（各々２語、１６語）次いで、（１７）番と（１８）番とがそうであり（各々１６語、２語）、（２１）番と（２２）番とも挙げられる。（各々０、１９語）このような個人差は教員の人数より一層多い中学生には現われていないことを考えれば教員の鼻音の発話には各年代にわたってゆれているという実態のほか社会人としてのことばの意

識、言い換えれば鼻音に対する標準意識あるいは美意識の点でプラス価値意識が働いたかも知れない。

そこで4章から全国的に［g］化しつつある現時点で鼻音に対する意識・意見はどうであるかということについてアンケート調査結果によって全体的な傾向を紹介して行くことにする。そしてその際、東京出身者と地方出身者との回答傾向にやや相違点が見られるのに言及することを断っておきたい。

4・アンケート調査の結果分析

4・1　内省について

＜表2＞　　出身地は小学校を中心とする　（　）内は%

	ŋ	g	両方が混じっているようだ	関心がない	計
東京出身者	6(22)	11(41)	9(33)	1(4)	27
地方出身者	10(29)	17(50)	7(21)	0	34
計	16(26)	28(46)	16(26)	16(26)	61

＜表2＞は［あなたは普段どちらの発音をしているか］という質問に回答した結果である。教員のほぼ全員である61名のうち、約半数（28名）が［g］と答えており、［ŋ］が16名、［両方が混じっているようだ］が16名で、内省でも従来の実態報告を裏付けているのがわかった。このような傾向は東京出身者のみでも見ることができ、なお地方出身者の回答からも見られる。さらに具体的に見ると地方の中、鼻音地域出身者は（長野県、茨城県、福島県、宮城県、秋田県等）［ŋ］を優先的に、非鼻音地域出身者は（鹿児島県、長崎県、愛知県、埼玉県、大分県等）ほぼ［g］と答えているが、混合地域出身者は（神奈川県、北海道等）［g］を優先的に、次に［両方が混じっているようだ］といい、［ŋ］は一番少ない。

4・2　内省と意識・意見との関わり

4・2・1　内省と標準意識との関わり

次に［どちらが標準的な音と思うか］と尋ねたところ＜表3＞のような回答結果が出た。

実態と内省については［g］が優勢であったのに対して標準的な音については

全員６１名	
東京出身者２７名	地方出身者３４名

<表３>　　（）内は％

内省／標準意識	ŋ		g		両方が混じっているようだ		関心がない		計	
ŋ	11(69)		4(14)		7(44)		0		22(36)	
	2(33)	9(90)	3(27)	1(6)	4(44)	3(42)	0	0	9(33)	13(38)
g	1 (6)		14(50)		2(13)		0		19(28)	
	1(17)	0	3(27)	11(65)	0	2(29)	0	0	4(15)	13(38)
分からない（どちらとも言えない）	4 (25)		9 (32)		7 (44)		0		20(33)	
	3(50)	1(10)	4(36)	5(29)	5 (56)	2(29)	0	0	12(44)	8(24)
関心がない	0		1 (4)		0		1		2 (3)	
	0	0	1 (10)	0	0	0	1	0	2 (8)	0
計	16(26)		28(46)		16(26)		1(2)		61(100)	
	6 (22)	10(29)	11(41)	17(51)	9 (33)	7(21)	1(4)	0	27	34

やや［ŋ］のほうが優勢となる。これは特に東京出身者で見ることができるが、要するに共通語と標準語との概念を別に考えている人が少なくないということだろうか。それは一般的な音ではなく、伝統的な音を基準としたか、あるいは放送アナウンサーの発音を考慮したのに起因するかも知れない。

次は自己の音の内省と標準意識とは如何に関わってくるのかについて述べたい。<表３>から見られるように、[ŋ] と内省した人の１６名のうち、半数を越える１１名（約７０％）が［ŋ］を標準的な音と答えており、［分からない(どちらとも言えない)] が４名で［g］はわずか１名に限っている。それに比べて［g］の内省者の回答はややバラツキがあって、２８名のうち、半数(１４名)が［g］を標準的な音と答えており、次は［分からない(どちらとも言えない)］が９名、［ŋ］が４名の順で、［g］の内省者は［ŋ］の内省者より、内省と標準意識との一致度がやや低いと指摘されるが、いずれにしても自己の音と内省している方に標準意識をもつ傾向があるのが指摘された。さて、前述から全般的に標準意識の点でやや [ŋ] のほうが [g] より高く評価されていたことを見てきたが、その数値は［両方が混じっているようだ］と内省した人が [ŋ] を標準的な音といい、さらに、［g］の内性者すらその傾向があるからである。

４・２・２　内省と美意識との関わり

<表４>

全員６１名	
東京出身者２７名	地方出身者３４名

（）内は％

美意識＼内省	ŋ		g		両方が混じっているようだ		関心がない		計	
ŋ	10(63)		4(14)		7(44)		0		21(34)	
	4(67)	6(60)	1(10)	3(18)	3(33)	4(57)	0	0	8(30)	13(38)
g	1 (6)		14(50)		3(18)		0		18(30)	
	0	1(10)	4(36)	10(59)	2(22)	1(14)	0	0	6(22)	12(35)
分からない（どちらとも言えない）	4 (25)		10 (36)		6 (38)		0		20(33)	
	2(33)	2(20)	6(54)	4(23)	4 (44)	2(29)	0	0	12(44)	8(24)
関心がない	0		0		0		1		2 (3)	
	0	0	0	0	0	0	1	0	1 (4)	1(3)
計	16(26)		28(46)		16(26)		1(2)		61(100)	
	6 (22)	10(29)	11(41)	17(51)	9 (33)	7(21)	1(4)	0	27	34

<表４>は、［どちらの音が美しいと思うか］という質問に対する回答結果であるが、標準的な音のとらえ方とほぼ同じく［ŋ］のほうが［g］よりやや優先になっている。そして内省と美意識と関わりも前述と同じく強い。一方［両方が混じっているようだ］と内省した人は美意識の点でも［g］より［ŋ］のほうをやや高く評価しているのが見られる。

４・２・３　内省と能率意識との関わり

<表５>

全員６１名	
東京出身者２７名	地方出身者３４名

（）内は％

能率意識＼内省	ŋ		g		両方が混じっているようだ		関心がない		計	
ŋ	13(81)		1(4)		3(18)		0		17(28)	
	4(66)	9(90)	1(10)	0	1(11)	2(29)	0	0	6(22)	11(32)
g	1 (6)		17(60)		6(38)		0		24(39)	
	1(17)	0	5(45)	12(71)	2(22)	4(57)	0	0	8(30)	16(47)
分からない（どちらとも言えない）	2 (13)		10 (36)		7 (44)		0		19(31)	
	1(17)	1(10)	5(45)	5(29)	6 (67)	1(14)	0	0	12(44)	7(21)
関心がない	0		0		0		1		1 (2)	
	0	0	0	0	0	0	1	0	1 (4)	0
計	16(26)		28(46)		16(26)		1(2)		61(100)	
	6 (22)	10(29)	11(41)	17(51)	9 (33)	7(21)	1(4)	0	27	34

＜表５＞は［どちらの音が能率的だと思うか］についての回答結果である。標準意識、美意識の点では［ŋ］のほうが［g］よりやや高く評価されていたが、能率意識の点では逆に［g］のほうがやや高く評価されているのに注意が引かれる。このような傾向は［両方が混じっているようだ］と内省した人から確認できる。次いで内省との関わりを見ると、前述から自己の音が［ŋ］と内省している人は他の内省者より自己の音にプラス価値意識をもつ傾向が高かったが、ここでは１６名のうち１３名（８１％）で、一層顕著に現われている。そして［ŋ］の内省者ほどではないが［g］の内性者にも同様な傾向が伺える。

４・２・４　内省と指導意見との関わり

従来の研究で中学生のガ行鼻音の衰退の傾向は、約半世紀ほど前から見えはじめ（注1）、時代によって進み、加藤氏の実態報告では（注3）、昭和１５年生まれ以後はほぼ全滅の状態であることが分かった。それに加えて当然ながら今回の中学生ではそれが徹底的であることが明らかになったと言える。

そこでそのような生徒を直接指導している教員に［［ŋ］を出すように指導すべきと思うか］を尋ねたところ次のような回答結果が出た。

全員６１名	
東京出身者２７名	地方出身者３４名

＜表６＞　　（）内は％

指導意見＼内省	ŋ		g		両方が混じっているようだ		関心がない		計	
はい	5(31)		2(7)		4(25)		0		11(18)	
	2(33)	3(30)	2(18)	0	2(29)	2(29)	0	0	6(22)	5(15)
いいえ	0		11(34)		7(44)		0		18(30)	
	0	0	4(36)	7(41)	5 (56)	2(29)	0	0	9(33)	9(26)
分からない（どちらとも言えない）	11 (69)		14 (50)		5 (31)		0		30(49)	
	4(67)	7(70)	5(46)	9(53)	2 (22)	3(42)	0	0	11(41)	19(56)
関心がない	0		1 (4)		0		1		2 (3)	
	0	0	0	0	0	0	1	0	1 (4)	1(3)
計	16(26)		28(46)		16(26)		1(2)		61(100)	
	6 (22)	10(29)	11(41)	17(51)	9 (33)	7(21)	1(4)	0	27	34

約半数（３０名）が［分からない（どちらとも言えない）］と答えており、［いいえ］という人が１８名（３０％）、［はい］はわずか１１名（１８％）に過ぎ

ず、[ŋ] の指導意見率はかなり低いと言える。このような傾向は地方出身者と東京出身者とを別に見ても大体同様なことがわかった。それでは内省との関わりはどうであろうか。

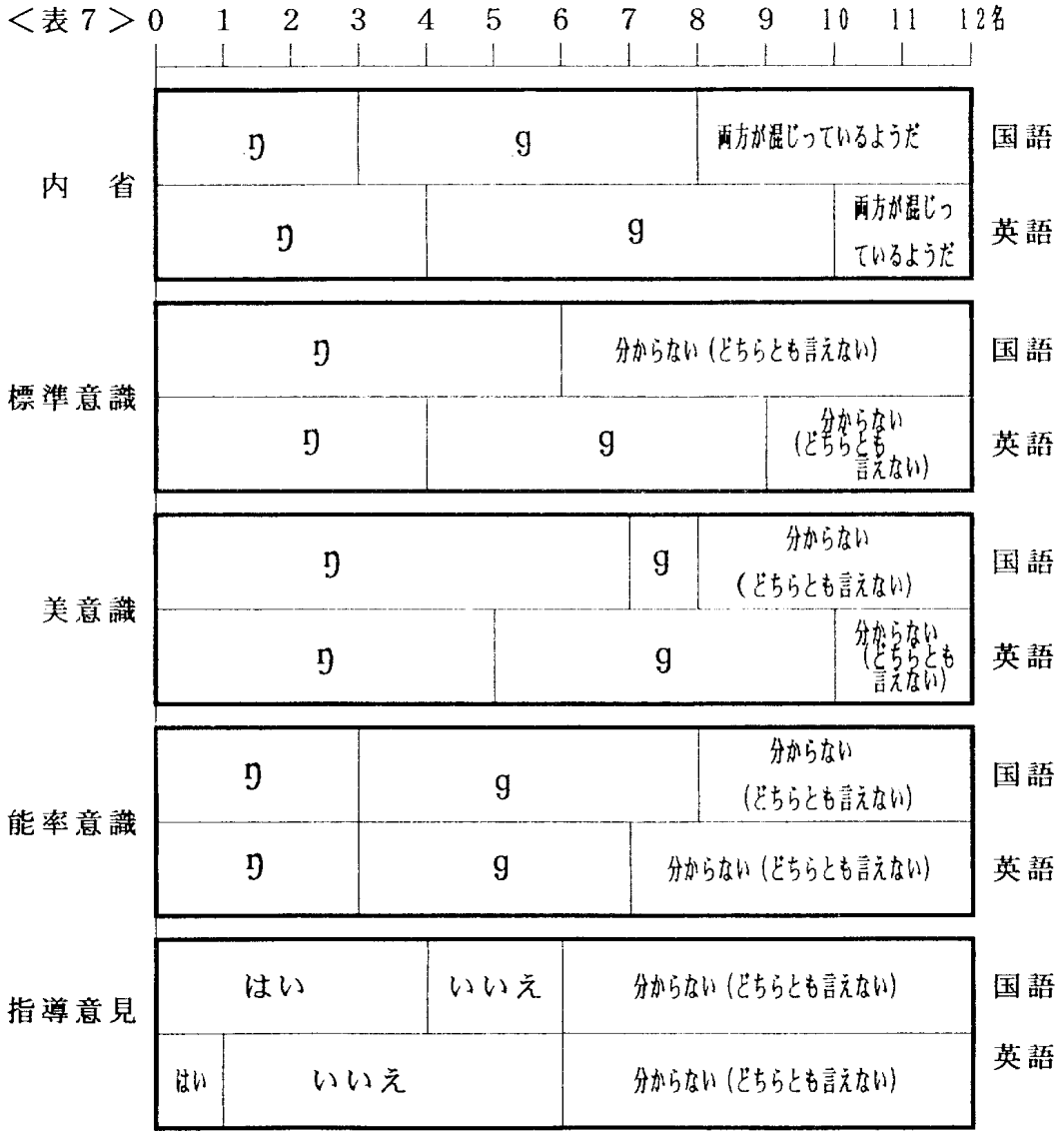
これまで全般的に自己の音が [ŋ] と内省した人は各々の意識の点で、[ŋ] を認める比率が他の内省者に比して特に高いのを見てきたが、指導意見となるとかなり異なり、内省との相関関係は低くなっている。例えば [ŋ] を指導すべきだと積極的に回答した人は地域を問わず、約３０％に留まって残りの約７０％が［分からない（どちらとも言えない）］と答えているようである。そこには全国的に [g] 化しつつある現実を無視することが困難であるという考えが働いているのではないかと思われる。（詳しくは次章５で論じたい）一方、[g] と内省し、指導すべきではないと答えている比率は約４０％で [ŋ] の内省者（０％）よりはかなり高いが、いずれも［分からない（どちらとも言えない）］という回答率が高い。また、［両方が混じっているようだ］と内省している人には、自己の音がゆれているだけに、答えもバラツキが見られる。

５・担当教科別における意識・意見について

前田富祺氏は『国語教育、音楽教育等で鼻濁音の指導をすべきだという意見もあり、実態の把握と理論的位置づけが要求される。』と言及されているが(注10) 今回の国語の担当教員たちは如何なる意識・意見を持っているのであろうかを見てきたところ他の教科はともかく国語科と特に英語科教員の回答状況とがかなり異なっているので両グループを取り挙げ比較しながら見ていきたい。

＜表７＞のとおり内省においてはあまり差ないが、国語科教員に標準意識、美意識の点で [g] より [ŋ] の方がかなり高く評価されているのに対して英語科教員には [ŋ] も [g] もほぼ同じぐらいに評価されているのが対照的である。それは以前国語教育で標準語教育が実施されたのに起因していると思われる。しかし能率意識の点では両方に [g] のほうがやや優先的に評価されているが、このような傾向は前述から見て来た通りに全般的な傾向でも見られた。次に [ŋ] の指導意見に［分からない(どちらとも言えない)］が多いのは、現代日本の趨勢としても国語教師は [ŋ] の指導にこだわる人がやや多いと解釈される。それに比して英語教師に [ŋ] を標準音として指導すべきではないという意見が国語

教師よりやや多いのは英語自体の発音ということ、また諸外国人にとって日本語のガ行鼻音の発音が難しいという国際的な情況を配慮しているためかと思われるが、今回はその理由を問う調査はしていない。なお音楽教師もかなりはっきりした意見があったが人数が少ないので統計的に論ずることは控えたい。



6・まとめと今後の課題

以上、従来の研究であまりなされていなかったと思われる教員を対象に鼻音の実態とそれに加えて意識・意見における鼻音の評価の傾向について内省との関わりを中心に見てきた。その結果は、次のようにまとめられる。

① 先行研究と付き合わせた音声事実でも鼻音の衰退を確認することができた。

そのうえに内省でも同様な傾向が見られた。

② しかし衰退しつつある中でも標準意識、美意識の点ではむしろ [g] を上回るほど [ŋ] のほうがやや高く評価されているが、能率意識の点にとってはやや [g] のほうが優先して評価されている。

③ 内省と価値意識との一致度はかなり強く、そのうち、特に能率意識にそれが著しい。総じて出身地を問わず自己の音を標準的な音、美しい音、能率的な音と考えている人が多いことになる。

④ 全体的に [ŋ] の方が [g] よりも標準意識、美意識の点ではやや高く評価されており特に国語教師にそれが著しいことが分かった。但し、[ŋ] を指導すべきという意見になるとトーンはかなり落ちている。それは今日、全国的に [g] 化しつつある実態を配慮した結果と解釈されよう。

いずれにせよ、今回の結果は小調査に過ぎないものであり、その結果の有意味性を論ずるためには一層多数人の調査による位相的な側面からの考察が必要であろう。また意識・意見の各項目との相関関係を検討することと意識・意見について回答した理由を問う調査等を今後の課題として残したい。

〈注〉

1、金田一春彦「ガ行鼻音論」『日本語音韻の研究』(1967)東京堂

2、杉藤美代子　「タマゴとタマゴ゛」『講座正しい日本語2』(昭和46年)明治書院

3、加藤正信　「東京における年齢別音声調査」『新方言と《言葉の乱れ》に関する社会言語学的研究』昭和57年度科学研究費補助研究成果報告書

4、永田高志　「東京におけるガ行鼻音の消失」『言語生活430』(1987)築摩書房

5、井上史雄　「子音の発音の変化」『講座正しい日本語2』(昭和46年)明治書院

6、NHK編　『日本語発音アクセント辞典』昭和60年版

7、此島正年　「国語教育における方言と共通語の問題」『覆刻文化庁国語シリーズ4、標準語と方言』(昭和51年)教育出版

8、加藤魁子　「韓国人に対する日本語教育」『日本語教育35号』(1978)

9、水谷修　「音声教育の問題点(3)-音を発音し分ける力と聞き分ける力-ガ行鼻音をめぐって-『日本語教育研究12号』(1975)

10、佐藤喜代治編　「国語学研究辞典」「鼻濁音」の項目(67ペ゛-ジ゛)より

文献

1、本堂寛　「標準語とは何か」　『講座正しい日本語１』(昭和４６年)明治書院

2、柴田武　『方言論』(1988)平凡社

3、東条操　「標準語と東京語」『ことばの研究室　Ⅳ』(昭和２９年)講談社

4、大坪一夫　「音声教育の問題点」『講座日本語と日本語教育３』(1989)明治書院

アンケート調査

「鏡」(かがみ)、「小学校」(しょうがっこう)などの（が）を発音する時、鼻に掛けて発音する[ŋ]（か゜）と鼻に掛けず発音する[g]（が）とがあります。それについて尋ねます。ご自分の考えに合う所の記号を○で囲んで下さい。

１、あなたのご自身は普段どちらの方の発音をしていますか。

ア、[ŋ]である　　イ、[g]である　　ウ、分からない（どちらとも言えない）

ウ、′両方が混じっているようだ　　エ、関心がない

２、どちらが標準的な音と思いますか。

ア、[ŋ]が標準的である　　イ、[g]が標準的である

ウ、分からない（どちらとも言えない）　　エ、関心がない

３、どちらの音が美しいと思いますか。

ア、[ŋ]の方が美しい　　イ、[g]の方が美しい

ウ、分からない（どちらとも言えない）　　エ、関心がない

４、どちらの音が能率的だと思いますか。

ア、[ŋ]の方が能率的だ　　イ、[g]の方が能率的だ

ウ、分からない（どちらとも言えない）　　エ、関心がない

５、あなたは、最近の生徒たちが、「鏡」(かがみ)、「小学校」(しょうがっこう)などの(が)を鼻に掛けて[ŋ]で発音せず、[g]で発音する生徒が多いようですが、それについて[ŋ]を出すように指導すべきだと思いますか。

ア、はい　　イ、いいえ

ウ、分からない（どちらとも言えない）　　エ、関心がない

－東北大学大学院生－